『オン・ザ・ロード』から考える様々な感情

陳　伊テイ

『オン・ザ・ロード』は 1957 年に出版されたノンフィクション小説である。作者は「ビート・ジェネレーション」という言葉を作り出し、その世代の代表人物の一人のジャック・ケルアックである。小説は作家自身が、狂って生きているディーン（実在していた人物：ニール・キャサディ）に魅了され、アメリカを横断する放浪物語である。主人公サルはこの放浪の旅を通して様々な感情を生み出した。人生には同じような感情が起きる場合があると私は思う。その故、この作品を参考に、これらのような感情にどうやって向き合うべきかを考えてみた。

まずは肉親の情について。映画は父の葬式から始まった。当時の生活に飽き飽きしていた主人公サルにとって父の死が、旅立つ一つの理由として考えられる。もう一つの理由はディーンとの出会いである。サルは何度か西部行きを夢見ていつも漠然と計画していた。そして、彼が初めて西部に向かったのはディーンが登場した後だったことを考えると、いかにこの出会いが重要だったかが分かる。

一方、ディーンが旅に出る理由も彼の父親と関係がある。彼の父親も常に放浪している。ディーンが生まれたのは両親がロセンゼルスに行く路上であった。そして、ディーンの人生は「父親捜しの旅だ」とも言えるではないかと私が思う。

個人から見ると「父親」という役割は一つの家族にとって非常に重要だ。自分の父との関係を振り返ると、小さい頃に与えられた影響は実に大きかった。もしサルとディーンの父親が彼らのそばに居てあげたら、彼らの人生は正に作者が書いたように送ることができていたかもしれない。小説の中でサルはこのように言った、「僕の望んでいることは、いつかは家族と一緒に僕たちが同じ通りに住んで、仲良く一組の老人になることだよ、ディーン」。

続いては”愛”について。彼らが”愛”に関する態度を見て、ハンガリーの詩人ペテーフィ・シャーンドルのある詩を思い出す。それは”Life is dear, love is dearer. Both can be given up for freedom”。作家自身の結婚は映画の中に出てくるエドという人と同様にお金のためであった。

そして、ディーンの場合は、好きな女性と結婚して、当時はどれほど好きになっていたにも関わらず、もっと好きな子がいたら、すぐ離婚してまだ結婚する。また、子供がいるにも関わらず、友たちに会うために全財産を使い果たし、家族を置き去りにしてしまう。

人を愛するなら、ディーンのように自分の快楽のために家族を置いておき、エドのように旅の資金のために結婚するではなく、責任を持って愛する人のそばに居てあげるべきである。

最後は友情について。人は自分と似ている人と友たちになるか、また自分と真逆の人と友たちなる場合がある。主人公の場合は平凡な自分と真逆の狂った人々と友たちになった。しかしあまりにも性格が異なって、彼はよく裏切られた。結果としては、みんなそれぞれの人生を送っていけずに、過酷な現実と向き合って生きていく。

本当の友情というのはディーンのように、重病になったサルを置き去りにすることではない。ブル・リーのようにサルのことを心から大切にして旅をするとき必要なお金を無言であげるような友情である。

『オン・ザ・ロード』はジャック・ケルアック自身の経験に基づいており、書かれていることはあまりにも今の現実に起こりにくいことのように思われるかもしれない。必ずどこかの場面で自分のことを見えてくるだろう。そして、読者はこの作品から何を考えされるのかも人それぞれ違うのもこの小説が今でも愛されている理由であると思う。

（指導教員　中村　敦志）